扶桑皇統記圖會 後編 六

遠
2505
13-13

明 遠
2505
13-13

扶桑皇統記圖會後編卷之六目録

朱雀院朝覲御幸　時平光等謀黜菅公條
三善清行贈菅公諫書　菅公得寃被為謫西府條
三善清行天象を見て菅公の書を奉る圖
仁和寺の法皇主上を諫めまいらんと宮門の立せる圖
菅公遺二十道明寺木像　播州曽根手枕松の支
菅公於配所詠詩歌　大宰府飛梅追松の條

菅公天拜山祈願之圖　海會春彦忠實死去條
寛平法皇築雙岡　法性坊夢謁菅公亡灵條
菅公筑紫天拜山ゑ祈願の圖　奸徒雷死法性坊行力條
浴中天変内裡雷火　光定國菅根変死浴中洪水條
時平患苛病薨去
太宰府天満天神宮居の圖
菅公贈官賜神号　延喜帝御譲位四海太平條

皇統記圖會後編卷之六

浪華　好華堂野亭参考

朱雀院朝覲御幸　時平光等謀黙菅公條

左大臣時平の不徳を引替て。右大臣道真公を朝家と重んじ忠勤を励まるゝ
ゆゑ。上皇殊更に菅公を御見限思召常に朱雀院へ召れて政事等を
談じ給へり。年菅公いまだ右大臣に昇進し給ふ。前昌泰元年上皇奈良へ
行幸の時菅公供奉の手向山東大寺の内を通りの時の御哥に

山ゝびとをぬさもとりあへず手向山　もみぢの錦神のまに〳〵

と詠じ給へり。歌の意は旅に出るに幣とて五色の帛を裁て用
意すべきなれども。此度は大切なる太上天皇の供奉なれば。道真が私の幣帛は用意し
がたし。此山の紅葉を道祖神の御隨意に道真が手向する幣帛と覧じて納受させ

ゆへとなり。是所時も君の辱を怠りなんね忠勤の意と一首の中に籠のひゝ御
歌あれば上皇も深く感じ思召いよ〳〵道真公を愛し給ひ主上に御勧奏して亮相の位
に進めゝ給へり。斯て昌泰三年正月三日主上朱雀院へ朝覲の御幸あり給ひ。左
大臣時平右大臣道真公其余の臣下も供奉せられる。上皇御怡斜みゝず。主上と
御土器とりかはせ給ひ御酒宴ありて賜ひ御物語なり給ひる序に上皇宣ひ給
ふ。當時左大臣時平と右大臣道真と相並で朝政を執行せゝ給ふ。好ふ仕れども
遂に小きゝらの逆ふ吏出来ゝ思ふれい時平ハ故基経の子なゝ年若く才短き上
不良行い有よゝ其ゆえあり。道真ハ年高く當時の俊才て天晴棟梁の臣と謂ゝ
されば時平が執政の職を止道真に関白の職を授け二人で万機の政を執行せゝ給ひ
天下永く太平あるべしと仰せられ。主上実と思召され公人を御前へ召出し給ひ。後
の卿一人に朝政を執行ひ四海の安寧をはかり給へと両君に〳〵勅詔なり給ひ関白の

職に任ずべきより宣ひ給ひ。菅公大に驚き御身に冷汗を流され御帯に
我繕代の権臣時平と起て関白職とあるべ必ず元龍の悔有べしと。君前に低頭
なり給ひ君命謹に奉ゝ給へり。臣儒宦の卑賤家より出て右大臣の高位を汚ゝ恐
きあれば。三度表を奉りて宜を解せ給ふ吏を願ひ給ふれども許し給ふなく天道へ
畏憚ゝ況関白職を賜らんとの勅詔ハ存ずもよらぬ御吏ゝ斯てハ左府を先〳〵
歴〳〵の貴族達君と恨ゝ給ふ。朝廷の乱の端とも成い。此義ハ幾重ゝも勅命か
し給ふる。と固く御辞退なり給ひるゝ。主上も上皇も本意なく思召ども迫
も許ゝ給ハ色目あれば。関白任官の義ハ止り給ひる。道真公両君へ奏し給ひるハ今
臣一人を留め吏を。左府以下の人〳〵異ゝ疑れい給ふれば。其疑念と解せ給ふ
詩の御題を給る。と願ひ給ひるゝ。主上実と思召春生柳眼中と
題をぞ給り給る。菅公右の御題を頂戴ありて君前と退り公卿の結所へ立帰り

もし今日道真を召れハ詩の御題を給らんと御吏なり。列位此御題ホて詩を作り天覧ホ具らるべしとて。右の題を披露あり。れど偖ハ其御吏ホていやとて皆詩を賦して聟覧ホ備られり。此日公卿の面々へ禄と下されるる。菅公ハ別ホ例禄の外両皇并ホ后宮よりも御衣を被けり。時平是を見て深く菅公と妬こいよ〳〵腸炭燃されるる。門華八月菅公祖父清公卿父是善卿の文章を集御自作の文章も加へ三代の家集都て二十八巻清公集六巻是善集十巻菅公集十二巻是を編て朝廷へ献じ奉られど。帝聟覧なりて御感の余リホ御制衣の詩をぞ賜りける其御詩ホ曰

門風自古是儒林　今日文華皆悉金
況連三代飽清唫　琢磨寒玉聲々厲
更有菅家勝白様　唯詠一聯知氣味
従茲拋却匣塵深　裁制衣餘覆句々侵

帝如是菅公を重んじ御賞美在ホ付て。左大臣方の人々ハ愈妬と憎まれる。昌泰二年十月十四日上皇ホハ仁和寺の益信僧都を戒師として御髪を落させ奉ひ法の御諱を空理と号し奉て。即ち仁和寺ホ御室を建させ入御あ奉て専ら真言の法を行ひすゑ〳〵のひろ〳〵是より世人仁和寺と号て御室と称し奉る抑仁和寺と申ハ宇多上皇いまだ御在位の時御父光孝天皇の御菩提の為大内山の麓ホ一寺と御建立あり光孝帝の御宇の年号を以て仁和寺と寺号し奉ひ益信僧都を住侶として真言宗を立奉ひ去程ホ帝ハ御年の長じ奉ホ隨ひ万機の政正しく臣下と恤み万民を撫育奉る事母の子を安んずるが如くなれど。四海穏ホして逆乱の浪起る事なし。一年冬の頃寒風殊更ホ厳しくれど。女官別ホ綿厚く御衣を献りけるホ。帝曽て著むつぎ。世の中の貧く民ハ。くる寒く衣ホも衣薄く凌ぐぬべし。朕今帝位と

踐とのゝども独り衣を襲て身を温かすあゝかゝあずゝて御簾の外へ出て
玉ひ一首の御製を詠じ給へり其御製かに曰

おろ〳〵と袖こそぬれ世の中の寒く人民は冬の夜かな

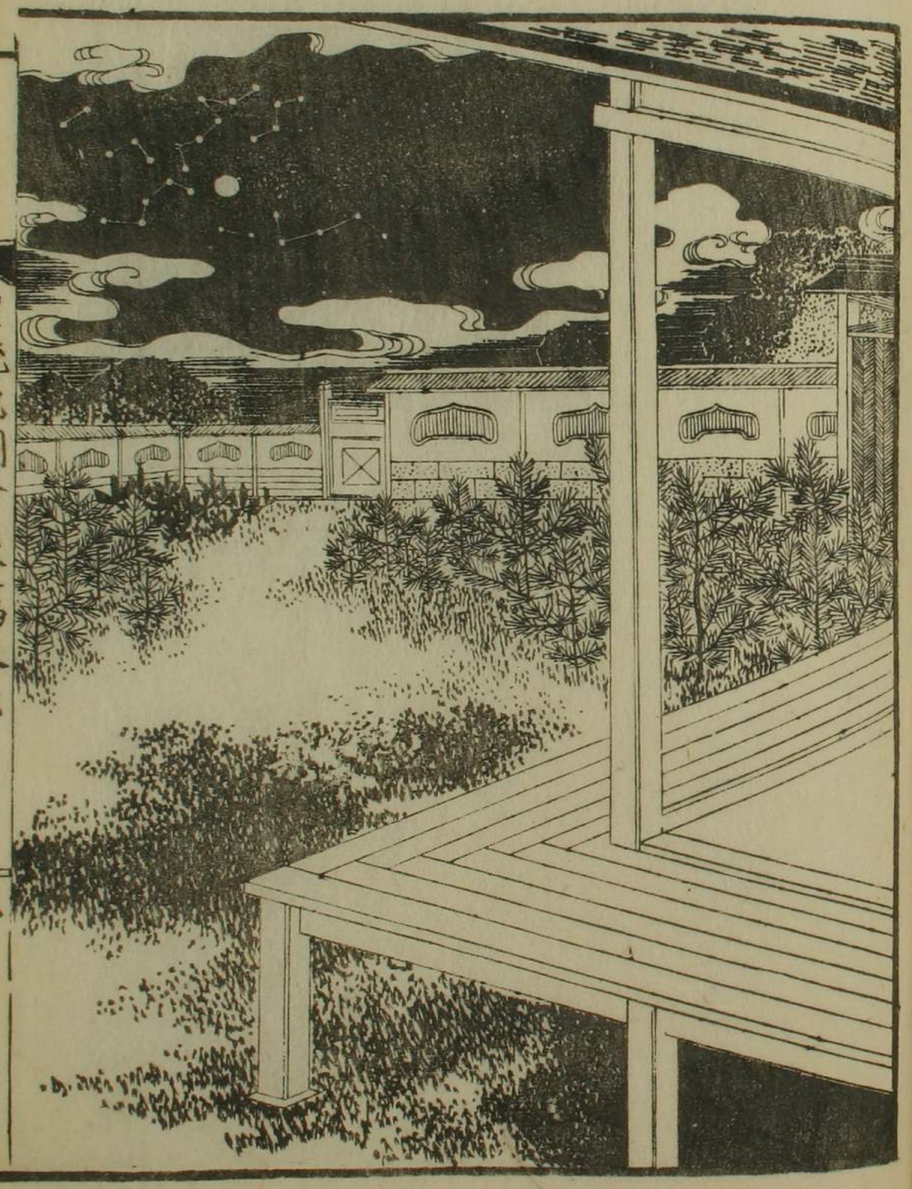
難有仁君なれど未だ延喜の聖帝とハせず也とも帝尚御幸若
く御座なれど定岡菅根の佞臣君を勧めまゐる事古の賢王巡狩と
号し春秋に田猟し民の艱苦を察し行旅の難易を量ると也君も万
民を撫育せんと思食ば宮中に乃ち御座ましまさんより折ハ山野へ御狩乃御
幸なりしに農民の耕耘する辛苦を叡覧ありしに事と言と巧みして
奏しなれば叡知の帝も両人の不正に引入まゐらんと謀る佞言ありとハ知食ず
実もと思召定岡菅根希世公下を召具しして神泉苑へ鷹狩の御幸
なりしに鷹と放ち給へる鳥と云て御入興あり御酒宴を催しなる所に

鷺一羽飛来りて池に下り魚を求食なれば帝甚だ興ぜ給ひ左右の近臣に
彼鷺を捉へて命ずべし臣下勅命を奉ハり両三人庭へ走り出て洲崎の岩陰に
隠れてうづくまる寄鷺を捉へんとせしに鷺ハ早くも池の深く游ぎ行更に手乃届
ぬる迫に遠去己に羽ばたきして飛去んとする時一人の臣下声をかけ鷺よ
勅命なるぞと去更分れと言れば不思議や主人とせ鷺忽ち汀へ游ぎ寄り
手近くよりるふより官人安と捉へて帝の玉座近く参りて叡覧に供へ奉る
君深く愛させ給ひ鷺に五位の位を賜ハり是より世人五位鷺と称初し
なり折しも菅公入来りなれば帝龍顔麗しく玉座近く召れ只今鷺乃
勅命なりと言ひ終て己と捉られ趣を語りなる菅公色を正しなり城
に天の君の勅詔ハ鳥類なれども畏りなる吏是の如し況や万民に於て君の龍駕の
向ふ所の者ハ恐く畏て農民ハ耕を止ず人々杖を止め自然下くの障りとなり悪

を生ずる基ぞ。分綸昨年殺生を禁じ田猟を止めしが今年鳥獸が何の科のゆえ。一旦出しの令倫言汗の如く再び及ずが鳥類ともに不信を示しの令ぞ。ムム後八御狩の御事と御止を有べ〳〵練奏〳〵されど帝理が責〳〵れて赤面しの心。御酒宴とも止めひて還御なしの心る。定國菅根等案が相違し。又〳〵左大臣の館へ集會し。兎角も角も道真在て八吏の妬かり如何もと追退んと奸計を商議〳〵れども。是ぞと思へ謀も案じ得ざれバ此上ハ陰陽寮の輩が咒詛殺させんと勅宣なりと偽り財宝と多く与へ所有冥衆を祭〳〵せ。菅公の形代を作て王城の八方が埋ませ。専〳〵調伏させられども神も非禮と受むぜれで。咒詛の術も更が其驗なしなり。

三善清行贈菅公諫書　菅公得寃被謫西府條

昌泰三年秋七月彗星現ぜられで。緒人仰ぎて大が驚ケ此星出る時八兵革起る〳〵繽。此頃左大臣殿と右大臣殿と御中睦〳〵ずと風説せり。是この吏より世の強ぞ出来ぞ前表がやと危〳〵合〳〵。茲が文章の博士三善清行と云人あり。先祖八百濟王の後裔ぞして僧淨藏貴所の父なり。清行博学多識なる上天文暦道が也達せ一名士なりるが。彗星を望んで門人が繽て曰今彗星現〳〵と。ぞ世人兵乱の起るぞ。乱あ〳〵疑ひ危ぶむとなども非なり。彗星八其年が因て吉凶定めど。今年の彗星八兵革の兆が非ず。恐く八是朝廷の大臣が禍ひあり。兆あるべ。夫が就て熟考るが。今右大臣道真公儒家より抽でられて三公の高位が登用せられ八素り其身の賢德が因ところあれども。左大臣時平公其身の不德を顧ず。平日が菅公と忌嫉む色あり。斯て八菅公終が佞臣の讒舌ゆえが災害御身が及ぶぞ。當時主上聖智が在せども。御若年なり。菅公朝廷を退けられむぐ朝家危るぞ。我菅公と深く交るがゆえぐれる



三善清行
天象と
見て
菅公に書
奉つる
三善清行

賢相の危ふきを他ふ人に忠臣の所行ふあるべし。依て書を菅家へ贈り我素意を表さんとて。自身文章を綴り門人をして菅家へ贈られる其文ふ曰

交淺うして語深ければ妄也今ふ居て来て語ハ媚也妄媚の責ハ素り能知とりべども。心ふ思ふ事を述ざるハ不信也清行叨く天文を窺ひ得ざる今年彗星の現るハ朝家の大臣ふ禍有るべし凶兆也且明年ハ辛酉ふて天命と革むる年なり。されば朝廷ふも物革る事ハ最天文ハ幽微ふして維ら身ふ禍ひ有るべしとも定め難けれども尊君ハ輪林より撰られて今槐位ふ昇皇孫外戚の上ふ立ち吏古より吉備大臣の外有事なし。夫高木ハ風ふ悪まるゝ疾く永相の官を辞し。光定國等の下位ふ就て其禍を避むべ朝家の幸福何事ふ過ぎべし伏て願ハ其ら微情を察して恐惶稽首首とぞ書さうる。菅公清行が練書を披見ありて其深情を怡びもれ

ども。如何思召さん官を辞せんもまた名ふ其位ふ不過のひそう是より前ふ左大臣方の佞臣ども公と兄咀調伏しれども其験なれば又光定國菅根ふ佞吉と逞うして帝へ強奏しるハ道真義已ら女の婿なる齊世親王を帝位ふ即。其身外戚の威を震ひ富貴を極れ。上皇ふとり入事君の御行跡を悪様ふ強くいい吏隠なくいい道真ら齊世親王を世ふ立んと思ふ望ハ一朝一夕の吏ふハいざ上皇いまだ御在位の時春宮なる君へ密祚を譲りおんと道真へ御内勅あり節道真遽て是を止めもしり申へ上皇も渠ら邪弁ふ惑されのひ御譲位の義を止りむへり是婚の齊世の君と帝位ふ即まるべしの下心なる吏顕然さ。然ども其後群臣ふ御譲位の義を問せのひふ春宮御受禅あるべ吏理の當然ふさいと群臣一同ふ啓奏しるに道真も申妨る吏然す。俱ふ衆議ふ順ひ君へ御譲位なりしに。と奏せしるども。其内心を深く憤り内く君を調伏しまつり風ふ風

説もはえいるんぐ跡形もあれ吏と交く奏し加えるまど后皇八時平の妹ホて在
せだら左府局長ホ尋く賄賂を与へ賀くやせよと命ぜられだ局長八身ホ
得の付と悦び審ホ后皇ホ絶言しくるまり八右大臣殿の御吏婚君ら齊世親王を
天位ホ即まわ〜せんくあ帝と兄咀崩御かさもまんと巧くまよ。急ど帝へ其由
を奏しまと信しやふ言上るまど后皇八御年若く素リ弁へなれ女性の御吏成
む大ホ驚れまひ帝へ局のもせ〜趣を内奏あり右大臣と退けまと時くホ御勧
あり〜。如此内外の絶奏度重リるれだ。さも聖明の帝も始八信ドおハざりれず
後く八少し御疑ひの睿慮と生じまひ具御遊與御狩ホとホ付て菅公度く練
まひしまと菅公と疎くまくまとさんども御嗔深れ御本性あれだ猶色ホも露八しむず
何の御沙汰もなくれだ時平と首と一味合躰の佞臣们八皆を満て足を掻心地
しく。斯て昌泰三年も暮明る四年ホ改元あり延喜元年と暦号しまと其年

の正月元日ホ日蝕しくるまど左府時平及び光定國公下大ホ悦び須波道真と退
くまれ時節至来せるら兼て巧く殺る主上綱伏の形代を納る筥と東山ノ将
軍塚の辺より堀出し所の者より術へ出と偽り帝の睿覧ホ入絶奏しくるま
東山よりる兄咀の形代を堀出しいて彼所の里民より差出しいへ検見いれ恐
まも君を調伏しまる由の願書と竜い最雅とも姓名八不記いへども必定道真ノ
所為ホていまし前公て道真ガ野心を企い義を奏聞ホ及びいへども君いまず信ド
まず。已ホ當元日ホ日蝕しいも。天より凶変を示しまと所ホて陰陽寮の者乃勘
文も元日の日蝕八大臣君を侵を凶兆ホていへ。天子の御身ホ深く御慎く在す
まれよし奏達仕りい此上八早く道真を退けまひて災害を禳ひまと。と奏
舌巧ホ奏しくるまど帝八先頃より佞臣の絶奏ホて御疑念と生じまひ上女御
より時く菅公と退けまと。内奏ありくるまより浸潤之譖遂ホ行ると。暦

受の想忽ち小成さ。明智の帝も元日の日蝕といひ調伏の形代を御覧あ
て睿慮暗くて大小逆難在り。怨る上六道真及び四人の男の官を損じて遠嶋へ
流罪せしめ齊世をも落飾せしめ倫命とゞ下しのひる。時平奉り叉成り
と独笑して君前を退き光定國菅根清貫希世ホの奸徒小勅詔の趣旨を
ゆせとも小笑坪小入急小宣命と書紀させて大納言清貫と勅使ら。解官流罪
の旨と菅氏へ遣しなるど無道なり。時小菅公ハらる凶変有とも知ず
御叅内わんとて己小衣冠を著のへ所小俄小大納言清貫宣命と捧て入来
りなれば菅公驚りもひ俄の宣旨何変小やと御不審晴むへども早速客殿へ
請じ入来の旨と問ひなる小清貫菅公小對ひ主上貴卿小御不審の義御座
まして右大臣の官位を剥太宰権師小任ぜられ筑紫へ左遷させられ并小四人の子
息達も解官して遠嶋へ移す勅詔なり最格別の御仁心を以て女性方小

御咎なし。雖有倫命の趣旨を拝聴せられよとて宣命と捧げ續其文意を
右大臣菅原道真義莫大の朝恩を忘却し我婚姻齊世を帝係小即其
身外男の威と恣小せん為隠謀を企朕と調伏せんと謀る其罪死刑小も行ふ
べきなれども先帝の御愛臣なるを以て死罪一等を免し右大臣の官位を削り
太宰権師へ筑紫へ左遷せしむる者なり。并小長男右大弁高惟土佐國次
男式部大丞景行ハ佐渡國三男藏人景茂ハ讃岐國四男秀才敦茂ハ伊豫國各
解官配流せしむべしとなり菅公大小驚れ男左大臣及び光定國等が
絶叫小依て宣命も聴敏の明君も佞舌小惑はれ事引れ道真小罪名と給ふ
なるべし。是天なり命なりと歎息しのひて為方なく宣旨の趣旨奉りい領掌
ありなる小ぞ。清貫ハまさに小罪名極る上ハ疾く配所へ赴く准備せるべしと憎さげ
小言捨笑を含でぞ去りなる。其後小て菅公の御臺所と共と御子息達姫君

女房達家士嶋田忠臣田辰青渡會春彦ら人々夢ゆ夢々ゝ加〻。是ハ如何なる勅紀ぞや。一点も曇なき己が身ゆ無実の罪と負せる恨めしさよと泣悲む声館の内ゆ充満さり。忠臣辰青春彦ゆハ堪ゝて菅公ゆ向ひ君前の御過ゆ在まゐゆる無実の罪名を称られ給ふ後昔の所為ある吏鏡ゆうけざれども顕ゆ出さり何ぞ一毫も再應ゆ御陳辯なり給ふる疾く御参内おて御身ゆ罪無きを歎奏ゆ申ゆ奄し。某们隨従し若輩人们妨げないば一ゆ斬て捨不敬の罪を身ゆ引受其場ゆて自殺仕るべと言上るを菅公制し給ひ予素り輩者の所為也と公疾知と雖も倫言汗の如く出て再び及ぶ所ゆ非ず。道真ゆ無失の罪ゆ論む吏好徒の輩と奏ゆ依ると也といへども是定業なり其故ハ往年渤海使斐頻子と相りて曰後年必ず位三公ゆ進ぶ。然ども久く高位ゆ居ず禍ひ其身ゆ及ぶと。果して其言の如。不肖の道真先帝の睿慮ゆ恢ひ追くゆ位階と進りのひて遂ゆ三台の高官を授ゆり。予君命の恭ゆを以て一旦拠位と汚せども相者の誡を想ひ一月立て三度まで表とりて官と辞れども主上ゆ上皇ゆ敢て許ゆ不ぶ。ぞるゆ依て末終ゆ禍ひの身ゆ及ぶ吏を知とのへども君忠を重ぶと今日まで三公の高位ゆ居り去年三善清行朽文を考へ予が災害ゆ遭ふ吏を先知。錬書残贈て官位を辞せよと勧へども己ゆ先年三度辞表と奉れども勅免あを上ハ今更身の禍ひを免まゐんと。君忠を顧ず身の安逸を計ハ忠臣ゆあずと所存と定め清行が諫をも少捨へ。此身の無実の罪ゆ沈む吏ハ素り定まる天命なれば雖ども恐み雖を悪む所ゆ。道真無実の罪ゆ淪む所ゆ天数ゆ。縦者蘇秦張儀の舌と借て君ゆ幾懇すとも何ぞ道真と配所の新嶋寺とあす吏を得んや。文王も羑里ゆ七年囚れ孔子も三月陳蔡ゆ困まれ給へり。聖人さへ時の不肖ゆ免ぬ。況や凡庸の道真ゆ於ゆや。你達が忠

義の志しハ喜ばれども右ハ皆すでにくもれる叅内を歎奏する所存なりと悟を
きりまひ〳〵御言ハ嶋田田ハ渡會ばかり其余の雑くも及ばるべきもなく皆
無念の涙ハ流れてゞ居たり多去程ハ門幸正月廿五日上卿ハ大納言菅根織吏
ハ右中弁希世時平の下知を受検非違使の下司看督長ハ異の張興五挺舁せ
菅家ハ到りて發足をせり五ゝ。菅公を兼て期〳〵の〳〵吏かれて。右大臣の衣
冠を脱捨見狩衣烏帽子と著て。御墓御子息方姫君達と別離の土器を酌
〳〵もひるゝ流る無実の罪ハ沈と思愛の妻子と生別〳〵の涙を悲こもひ一首の
和歌を詠じもひ渡會春彦を御使ハて仁和寺ハ在す法皇ハ献の御歌ハ曰

かゝれ行こゝ身ハ藻屑とおもねとも君柵とたゝてとゞめよ

春彦是を給りて泣〳〵仁和寺の御所へ赴ゝ。菅公ハ嶋田忠臣ハ御墓所姫
君達の御伽抱の義を託〳〵の〳〵御身ハ田晨音を隨従〳〵張興ハ乗りの〳〵れて

四人の御子息も愁然〳〵て各張興へ乗の〳〵る是を見の〳〵御墓姫君声を放て
よゝと泣伏もひ女房達諸士奴隷婢女ハるる迄御別を悲こて哀慟〳〵実や別
離の中ハ生別ほど悲〳〵ハわ〳〵ずと古人の言へ人〳〵の身の上ハ思ひ合されハ心ハれ下
官駕輿丁も不覚ハ袂を沾〳〵増てや菅公の御心の中さを悲〳〵の多ゝれも
より氣もれ御顔色ハて涙の色もえせもハね御心中を推量り泣ぬ人を無りゝ
斯く駕与丁ハ思ひ〳〵ハ五挺の張興を舁上て舘の門外を出れば。菅根希世左
大臣の舘へ帰り五挺の輿も五方ハ別を舁行ゝ。ゝれば菅公御左迁の憂情と
述の〳〵二十八韻の御詩の中ハ聞人腸を断想せり

自従勅使駈将去　又子一時五所離
口不能言眼中血　俯仰天神与地祇
呼悼〳〵ふ仁明文徳陽成光孝宇多の五帝ハ事〳〵忠勤怠なく。朝政の為ハ

唇を吐めひ一忠臣も忽ち競く舌の為ふ無辜一て左迁の客と成ぬ。そ是非ふ
実や古人も叢蘭茂んとすれど秋風是を破り。月明ふんとすれど浮雲是と掩
と賦一。又人君治んと吏を願ど佞臣是を乱すと言ん。今延喜の御代ふ思ひ
合される。菅公無実の罪を得て左迁せられ一吏と洛中洛外の人民ぞ傳て
大ふ歎ず今の世菅丞相居むぞ人ど。朝廷の政乱と世ハ暗闇ふ等一る者一とて
貴賤老若とも躁ど惑ひ。左大臣ハ止り右大臣流され一ムて右流左止一一ど言
罵り々る今の世まで心ふ憂と世一吏を右流左止とる八此言の遺とるなり。誠ふ
末代まで賢王と称せられ一延喜の帝も。菅公を左迁一ぬ一ハ御一代乃御
過ふて在一々。是ハ且ま菅公ハ二月朔日ふ任列一舘を出ぬ夢路を剽る
御心地ふて駕も到むぞる張典ふ淘と都の街通らせるを。老若男女路の両
辺ふ充満一て御餘波を惜一涕泣む声街ふ充り。情を尋ぬ下吏们妨ふ

者を苦懲一追ふ。已ふ五條坊門西洞院を通りる八此所ふ紅梅殿とて菅家
御別舘有々れど。菅公看督長を召と苦一々ずで少時別舘へ立寄まれり。
より仰々ふ長ハ情ある者ふて領掌一。都をで子刻九ツ限りふ出一進せよと命
今と云ふて内へ。宵の程ハ苦一るすぐ一いとて。典を舁居て入ぬ。菅公大ふ
御喜悦あつく申通一せのひ々ふ思ひもよず却て室所姫君達。今一度の御對面
を願んとて。昼ふ紅梅殿へ来りぬ。御通行を待とるぬ一吏なれど薄び出て公
乃御狩衣ふとう槌り左右の御言ひなる面ふ声を放て泣ぬ。菅公殘れぬ涙ふ
制一ぬて思ひきゝ。你達ふ此所ふて再び對面せんとて。今更心塞る心地一ぬ何
是と御物語ありて不覚時を移一ぬ。然ふ不思議なりる八。洛中の寺院の僧
徒。菅公今夜九ツ時限ふ帝都を出ぬと傳聞維言合さ。ども九ツの鐘を撞ず加
之ずず御名殘惜さふ八ツ七ツの鐘も撞ざりれど。敬言固の宦人们も夜の更るを

まゝにて旨何心なく坐睡て在るに六角堂東寺などに晨朝の鐘を撞鳴しるに
夢覚て眼を覚して天を見れば早東雪の頃なるぞ。大に驚いく田口辰吉と呼出し
少時の内と仰るに（私に此館へ入進ぜしに）早夜も明方になり。疾く出させよ
と言上ありと言るぞ。辰吉諾して菅公へ右の由申上れば公も鐘声御心に徹
し。夜明なれば人目も恥しと。御名残尽せども心強く立出る。御基姫君達も今
更御別の悲しさに声を惜ず泣沈む。七つ五つの幼き姫君は父君の袂に縋り裾に纏
りて泣叫ぶ目も當られぬ風情なり。公は是に振捨ひのひて立出るに早明方の
灰明れば御愛樹の紅梅今を盛と咲乱れ公御賢し是を都の春の名残と思召

東風ふかば白ひとらせよ梅の花主なしとて春な忘れそ

と詠じ給ひ櫻を御覧あるに花咲ざれども終の盛を思しやり
ちらで花やあるを忘れとのあるに吹ん風にぞ花てらせよ

時を感じては花も涙を灑ぎ別を惜ては鳥も心を驚すあゝ見物皆御心を悼ま
しあざるかな。春の曙の艶なるに繽紛の折なれば哀れに物悲しく覚るに
平貞盛菅公を敬ひ親く睦びしる人も今般の御左遷を歎き朝廷を恨み泣れも
流石左大臣家の咎を怕まるにや御見送に参る人もなく寂寞と紅梅殿を出給ふ
因に曰北野天満宮御造営の後六角堂東寺あるに晨朝の鐘を撞き神殿
大に鳴動しるに（其後八六角堂東寺とも明六の鐘を撞ずしるや）
斯て菅公上鳥羽に到る所。此所より御船に乗る人多く船ぞ乃宜
人（曳渡し）都の菅公を皆帰り。菅公と御見送の御親族御人達も皆涙の袖
を別て帰られる。其中に御基姫御見送の使者を返しるすとて

君がすむやどの末をあくまで隠るゝまでかへりみれ

と詠じて御臺所（贈り給ひ）。遂る所に渡會春彦帰く走来りて菅公御

賢ごと近く召れいるゝや春彦法皇の御所へ参り手ゞ歌を献りしを聞き春彦砂地ゝ跪れさんい御室御所へ参上り。御短冊を差上けるに法皇公の外ゝ驚き給ひ主上御年若くして統者の行ゝ惑まるゝ朝廷の思召す道真と無罪ゝ左迁ーのことと薄情なれ。今の世ゝ道真あるゝ万民の数九世の孫と成ね。帝とハやせども我子なり。恭内と練や道真が流罪をヤ宥む。汝我ゝ隨ひ来よと宣ひ御輿ゝ乗ゝ出ゞ御草履を履て大内へ行幸なーるゝ上西門より入御あり清涼殿ゝ近着のゝ閉門せよと宣へども。左大臣殿の針ゝと相見へ敢て御門を開く人もなし。増て御狩奏者もいかゝ。法皇甚ゝ憤らせ給ひ我ゝ何の咎あるゝ恭内を拒むや。門を開うずんば開くまで待ゝと宣ひ大庭の稼樹の下ゝ停まる。日の暮るゝも厭ひむゝと待せ給へ。仁和寺ゝ御輿を舁て大勢参れ還御勧めまれども。法皇更ゝ用ひむゝど。餘寒厳しく終夜あやなく衛ゝ卯の刻ゞ

待ゝ居れども。遂ゝ御門開ず狩奏ーなる人もいかゞ。法皇も御力なくもどゝと還御なーるゝ。ハ城ゝ恐多く御輿ゝ乗ゝ下りゆゝと言上御暇を願ひ是まで弛参いと。輿の始末と委く言上ーるゝゝ菅公御落涙ゝ狩衣の袖を浸ーるゝ。法皇数多ゝ臣が左迁を嘆ゝるゝ。至尊の御身ゝ泥土を踏せるゝ。剰へ春寒の御膚を犯ーなる我も厭ゝ思ゝ。終夜玉躰を困めるゝハ偏ゝ道真が罪なりとて仁和寺の方を遥拝ーるゝ。船方の官人ゝ時刻移りゝあるゝ疾御船ゝ乗ゝと急がーなるゝ。菅公春彦ゝ仰ゝ今宵ゝ内ゝ予ハ乗船ー筑紫へ赴けば。今生ゝて再會せん事も預め定ゝ。汝を故御帰リ。心長閑ゝ老を養ひ給へと言捨船ゝ乗入ーるゝを春彦ゝ泣ゝ御袴を曳とも是ハ何なる仰ゝていや抑君御出生の昔より今日ゝいるゝ迄一日も御館ゝ去ず重代の主君と思ひ事へまるゝゝ遠く配所へ赴れるゝを

仁和寺の
法皇主上を
諫めむとて
宮門に立せ
給ふ図
春彦

爭う見捨ちまいらせ小宦當年八十七。翌朝とも云へ露命とゝ。故郷へ帰る存
心毛頭いなし。老ゆ耄て御脚手纏と思召筑紫の隨從ゆ召連め給ひ。生て中
く物思ひ。いの人より。此水底へ身を沒し。ゆ。已ゆ川へ飛入んとするゆ。ご田口辰音慌
て抱れて。老人の斯程まで思結ひ。方望隨從ゆ召連させ給へと願ひ奉るゆ。ご公
御承引在り。さて兜も角もとて御船ゆ乗り春彦大ゆ台び辰音が好意を謝
とゆ船へ乗移り奉るゆ。官人船子ゆ纜を解せ。西を臨んで船を走らせる

菅公遺二十道明寺木像　播州曽根手枕松之事

斯て御船ゆ追風ゆ從ひ八幡山崎ゆも走過る。日和爽て雨そゝぐ。降出り斷
くゆ降增りて笘洩雫も紡績る。船子る御痛り。思ひ河内國佐田の里
へ御船を著雨の霽る待る。ゆ當所の長真木某菅公御船ゆ。
船へ參り。余りの大雨ゆて程ゆ某が茅屋へ入せる。今宵ハ草の席ゆ一夜を明さ

せと言上ゆ。菅公ゆ。此義如何あるべと問せる。ゆ苦う
いまゝ。辰音春彦官人ゆを召連る。真木ゆ郷道まさせて其家へ到り。真
木ハ大ゆ尊敬て御主器を献り飯を勧まいらせ。て。當侍る。公其深情を謝
る。ゆ當所ハ何と。里と問る。ゆ家翁答て。河内國佐田と呼ひと言上る。茲
も此里より當國道明寺まで程遠ゆ。家翁答て道明寺へハ凡
五里ばかりもやいと言上る。菅公曰く。道明寺の住僧覚寿尼と申ハ予が伯母
前なり。都ゆ在り。時ハ公務繁く。紡ひ進ず。眼も暗く。今左遷の身と。ゆ程
遠く。此里へ来ハ不敢。僥倖なり。日もいまゝ黄昏ゆ。伯母紡ひ。
てんやと。警固の武士ゆ願ひ。ゆ。今夜の内。ゆの御使ゆ。苦く。来
明ゆ還せ。と。御承ゆ。菅公ゆ。辰音と警固の武士を召連る。
御身ハ賤の竹駕ゆ乗長ゆ御道まさせ道を逸ゆ。て道明寺へ到る。ゆ。

頃ふと暑のひるを基とう公前ふ覚寿尼公菅公左迁の御身と成まりと宣ひく
大ふ残れ勢れるひ基又紅涙ふ法衣の袖を浸しのひ多ふ今宵も寸共臨ち
るひれを夢ゝと幷ひの声も菅公の御顔さんのふ付て言葉より先御涙と
先ゝる菅公八伯母尼公ふ御對面おゝて其御無事を祝しのひ配流の身と成へ
も再の拝顔も期しゝ今生の御暇をのゝめ参いと仰れも尼公雨くと泣くひ
彼唐土の屈原と申人ふ続言の為君ふ疎まれ江潭ふさまよひ見ぬ唐間の昔猶と
のゝ思ひ出ゝ豆ふ豆事ひきゝ今御身左迁の事と成ふ八とゝて人の雑面世の憂と
等ゝて悔ゝ恨のひる涙ふ流ひて又曰く素リ過ちなゝ事ふれ御身ふ成れ天
君も程ふく御後悔在し。故洛勅免の紀命下リ芽出度旨の使ふ選ひ召れ期も
待ゝ召れも尼八年いゝ老て翌日の命も頼まれと願ゝ八御姿を繪ふ写しなゝ
とも木ふ刻カラとも此まゝ遺しの道しの帰洛在す迄の御筐ふ朝夕ふ見まらせて老

の心ふ慰め侍る者しと望ゝのふを。菅公有合木ふて御手ずから御身の像と刻を
のひるふ。ふ雑造の内ふ早八声の雞の音ふ驚れ警固の武士孩ふ已ふ暁ふ
及び雨も疾雲い御名残八尽すまじく今八御船へ還せ申と言上ゝる。菅公も為
方なく荒木造のまゝ尼公へ進せのひ。御別を告むひて立出のまとて
帝むゝとこれを急げ雞の音乃ふ聞ぬ里のおろかもゝ郎
と詠しのひ終ふ道明寺と出のひ佐田の里へを還せのひる此御哥より今ふて
河州土師村ふ雞を飼ゝとゝ。斯て佐田より又船ふ乗のひ流ふ順ひて摂津渡
辺福嶋まで下リのひるふ西風強く吹出しれ。斯て八御船を下し雞とて福嶋へ
船を着風の和風を相待ゝる。其風待の内ふ菅公陸へ上ゝせのひ其所此処と逍遥し
のひ難の大臣の都へ潮と運送せゝれ吉郎を御覧し其辺の森陰を通リむひ
ゝる。ふ松の葉の露風ふ吹れて降落御狩衣ふ濡れ菅公とゝ

露と散風に袖しを拂はゝ都のつゝぬ四つひいつがまてど

と詠じ給へり。後に此所に天満宮を造営し露の天神と称するも此御哥に依て号し所なり（俗に云ふ天神とゝり）又風待ち御船を著し福嶋に御社を建ゝ（上下三社有）去程に両日紆余く西風止んで纜を解て御船を出し給ふに是より追風吹續て摂津路を過急ぐともなれに御船明石の浦に著給ふ。當所の駅の長は菅公先年嶺岐の係下なりし節長が紆に宿らせ給ひ御懇の御言葉を下されたるに思ひ重き尊敬し種々管待しまゐらせ（今度も船を下させ給て長が紆へ入せ給ひ）駅長菅公の御左遷の義を疾より傳聞て大に嘆息し歎れたるに今こゝ寄せ給ひしを幸と深く悦び席を掃浄て御座を設請へまゐる。尊顔を拝して不覚の涙に暮れ畳に額を付て少時頭を上ざるに稍有て面を起し不慮御左遷を御悔申上流涕に膝を浸し給ふ。菅公駅長を制し給ひ一聯の句詩を吟じ給ふ其御詩に曰

驛長莫驚時變改　一栄一落是春秋

駅長是を拝聴して深く感慨し涙を落す。然に其夜より大に逆風吹出れば順風に吹かるまでと。長が紆に逗留し給ふ事三日にして漸く風追風なり給ふ。船子より其ゝ言上するに菅公長に別を告て御船に乗給ふ。駅長の逆風の十年世年吹續くと祈り甲斐なく今更別を告ると悲み船中の御慰にと種々の物を献じ涙ぐみ御見送をなし給ふ。物の衣とまゝぬ船子ども早纜を解き漫々たる海上へ乗出し帆を曳揚て追風に孕せ御船を走せ給ふ。駅長は御船影の見えぬ迄足を翹て見送り進らせ浜に家路へ帰り給ふ。去程に菅公は所柴御船の中より浦山の景色を御覧ぜらるゝ事一年嶺岐の任に下り給ひし時は風景と詩歌の御詠吟有しに今は夫に相反て東の旅に赴き給ひ彼業平おもはねども。汝の鷗や都鳥かゝる吏に向ん便もなく。胡地に流るゝよ

蘇武八ろうず。西羌を飯る鳥ゞゆゑ文言傳ん術もなく。岩ゆ碓る浪の音ゆ御心を痛
ゆめ。沖ゆ汐吹く亀の章御魂を寒くうるゆゑ。泉郎の呼声漁火の影見物聞物
御涙の種ゆゑ。ぬ。なく。都ゆ残りの御臺姫君達の御歎れ。又ハ國〻へ流されの
御子息方の御物思を推量らせゆゑ。御神の子る間もなく。御爵陶の余りゆ御船
心生ゞて伏悩すせゆゑ。御食事も進ゞむゆゑ。春彦辰音大ゆ驚れ。警固の武士
と商織。皆く陸地を歩せまゞ。御心地も整らせゆゑ。ゞ。と。播州印南郡
曽根へ船を着て陸へ下りまり。駅馬を求て乗ゆゑ。春彦辰音宜人も随従
して行れゞ。遠近の里民菅公と拜せんとて。老ゆゑを扶け幼れを負て路の傍ゆ
群ゞて涙を流さぬハ無りゞ。菅公馬上ゆて松の枝を折取ゆゑ。予此度勅勘と
蒙る吏。身ゆ犯せる罪無ゞ。此松根を生ゞ栄ゆゑ。ゞ。と。又犯せる罪あゞ
其まゞ枯ぬゞ。と。馬より下ゆて路の辺ゆまりゆゑ。往過ゆゑ後果
て根を生枝葉年〻ゆ繁茂り。播州第一の名木と成り。曽根の松是なり。後ゝハ枝
長く這ゞゆゑ。杖を立ゞ衝せまゞ。手枕せ如くあれゞ。曽根の手枕の松と呼
名りゞゆゑ。菅公陸路を西三日経ゆゑて御心地も平日ゆ復らせゆゑれゞ。又御船ゆ
ゆまれ日ゞ歴て豊後國三井田の浦へ御船を着たり。菅公少時陸へ下りゆゑ仰ゞる
ゆゑ。船長船の綱を緒て回座〻御座を敷れゞ。公其ゆ坐りゆゑて沖の景色を
御覧ゞ。張爵を慰めゆゑ。世ゆ綱敷の天神とやまる。此時の御影なり。斯て
又御船ゆ乗八重の汐路ゆ淘ゞゆゑ。筑前國博多なる袖の浦ゆ御船を着是
より陸路を守護〻まり。せ。月國御笠郡太宰府の郡司秦民部時貞ゞ館舎
へ入まりゞ。民部ハ兼て都より下知を承。四方ゆ堤を築れ。其内へ高塀をくけ館
を造設て待受まりゞゆゑ。即ち其館へ入まり。監平と付て厳く御門を衛らせゞ

菅公於配所詠詩歌　太宰府飛梅追松之條

菅公已に配所の館へ入せ給ひしかバ都の官人下吏们を御暇を願ひて京へ帰り跡に残り留る者とてハ田口渡會其余ハ言甲斐なき下郎三人のミにて。いと寂莫く思召御館とても壁浅間に板間も間粗にて。透間洩汐風もいとゞ御身に染けれバ一時の御詩に

離家三四月　落涙百千行　萬事皆如夢　時々仰彼蒼

と賦し給へり宰府ハ人も多く折にハ御訪ひに来る人も有ども墓々しく物も言ず多くハ御對面もなし玉ハず。引籠がちにて唯異國へ推移されたる心地し給ひ事訪白なる衛鷗の声々も御夢を破る媒となり音信もなく軒の松風も却て御涙を誘種となり万事都に変る事のミ多くして。明暮なげきがちに過させ給ひ一時遠方に立煙を御覧じ

　夕されハ野にも山にも立烟なげきよりこそもえまさりけれ

また雲の浮立たゞよふを見給ひて都の空乃こひしく思召

　山わかれとびゆく雲のかへりくる影見るときハ猶たのまれぬ

世ハ憂きものと思捨がたく猶帰洛の期もやと思召す折しも雨の降る日

　あめのした隠るゝ人のなければやきてしぬれぎぬひるよしもなき

月乃明らかなる夜の御哥に

　うみならずたゝへる水の底までも清き心を月ぞてらさん

　野を詠じ玉ふ

はくしかも紫おふる野辺ハあれどなき名悲しむ人ぞきこえね

　道を詠じ玉ふ

苅萱乃関守のミ見えつるハ人もゆるさぬ道邊成けり

　山を詠じたまふ

あしひきのこなたかなたに道ハあれど都へいざといふ人のなき

鶯を詠じ給ふ

溪ふかく春のひかりのおとなれぬ雪ふりくる鶯乃こゑ

有明月を詠ト給ふ

宵の間やうゝやうゝ空すみもせで心づくしの有明の月

歳とく意を詠じ給ふ

心ぐにまことの道ふるひなぐ祈どゝても神や守らん

右の御哥の意を天道ハ善ふ福を与へ悪ふ禍を下すの理なり一首の中ふ述ル此一首の御詠唫を心ふ持人を貪慾非分の望を裳と吏なれ雖有御哥ふて邪慾の為ふ神を祈る愚昧の族を誡め給ふ神詠なり又一時の御口ずさみふ見る石乃ほとりの塵もふるざるれ節の揚技もつたなくと是ハ京童の言草ふ竹の揚技をつたなく硯の塵を吹者ハ無実の難を受るゝ

ゝ我公て御身ふ犯しゝ罪ふ於れども終者の舌頭ふうつて斯左遷の客となる吏よと歎息しゝて御哥なり又一日張鳳の号る式御覧ト賦しゝて御詩ふ曰

我為遷客汝来賓　共是蕭々旅漂身
歌抗思量歸去日　我知何歳汝明春

斯詩歌を詠じ給ふて御身の不運を悔給ふて痛ハしくなる去程ふ月日ふ関守なく御憂愁の中ふも春去夏過て秋も稍ゝ九月十日ふもなれハ去る昌泰三年九月十日の夜清涼殿ふて菊花の御宴あるゝ時菅公も御座ふ列ゝ献じ給ひ詩ふ曰

君富春秋臣漸老　思無涯岸報猶遅

帝右の詩を睿賢なしゝて御感の余りふ御衣を脱ひて被させ給ふ式菅公舞踏して拝領しゝ其御衣を抗紫まで持せ給ひ君の御紀念で常ふ上段

乃筍ヲ納め朝夕ヲ拜礼しまつり。此一条とゝても菅公帝と聊も恨くゝ忘ざる吏と知ル
足り。然ル今九月十日なれば。去年の今宵の吏を思ひ出しまつり。緘ヲ人界の栄枯定
なく盛衰掌を覆ヘ如くなると長歎しまつりて作らせ給ふ御詩ヲ曰

去年今夜侍清涼　秋思詩篇獨斷腸
恩賜御衣今在此　捧持毎日拜餘香

緘ヲ懐旧の御愁情の程ぞ悼ましくるさしぬ。秋の物悲しく。秋の上風秋の下
露笹離ヲすゞ〳〵虫の音も何ぞ御涙の種ヲ〳〵ぬハなし。程なく九月十五夜ヲ
一天雲なく霽て月清朗と澄昇ると御覧ずるヲも。都ヲ在せし時殿上の月見の
御宴ヲ侍しまつりて。詠奇詩作ヲ懐と述奥ヲ樂ませ給ふしも。今ハ盧生ヲ夢と成
て吏紡まる者とてハ沖津汐風のくゆれば。独御心残友として七言律の詩と賦しまつ

黄萎顔色白霜頭　呪復千餘里外投
昔被栄花簪纓縛　今為敗謫艸茱由
月光似鏡無明罪　風氣如刀不断愁
隨見隨聞皆慘慄　此秋獨作我身秋

斯御物おもひ〳〵ふ月日と送のゝ御痛〳〵ふ。抑太宰府ヲハ都府楼と
天智天皇の御宇ヲ建られし宦舎有又ハ帝の勅願ヲて御建立有し観音寺
と云。梵刹もあり。菅公ハ兼て観音と御信仰在し。和州初瀬寺の縁紀ヲも自
筆ヲ書せ給ひし程の御吏なれば。御参詣の有度ハあれども。不出門と門を出
しの誓と立給へば都府楼への登ヲ忌ミ。観音寺へ御佛詣もなく。只金所ヲ
見なしまつりし一時不出門と云題ヲて作らせ給ふ詩ヲ曰

一從謫居就柴荊　萬死兢々跼蹐情
都府樓纔看瓦色　観音寺只聽鐘声

中懷好逐孤雲去　外物相逢満月迎
此地雖身無撿繫　何為寸歩不出行

就中都府樓観音寺の一聯を。唐の白樂天が遺愛寺鐘欹枕聽香炉
峰雪撥簾看と賦せ〜對句も勝れり。其頃の博士も感賞せ〜とぞ
斯て配所に幽居〜の所に。其年の冬の首庭前に夜の内に一株の梅樹生出
〜。辰音春彦に庭を浄むる奴僕の斯と告るに依て。両人紛リテ連立て
庭前へいそ〜ろ。実も昨日まで無ア〜梅樹兼てより生〜如く更に今植
樹とは思えず。已に毎枝に蕾を生じ〜。辰音春彦奇異の思ひをなし。菅公
に斯と言上られば。公も不審めひて見るに両人の紛のごとくもれば不測の思ひ
熟歩とえに将是都の紅梅殿に植ゑ〜御愛樹の紅梅なりけれ
膝を拍て雖息〜ひ。是ハ我都に〜多年愛せ〜梅樹なり。是に就て

思ひ出せ〜事あり。予都を出〜折ふし紅梅殿へ立寄〜に此梅感なり〜内へ都
の春の余波を〜く。東風吹て白ひとしをせよと戯れ口號〜に其歌に感じ
山海數百里と隔ふる此筑紫まで飛来ア〜吏不思議の中の不思議なり
草木非情とは〜ず。伊勢の歌に感じ主を慕ひて来ア〜優〜さよ。構て
小枝をも折取吏勿れと曰ひ都を出ひ〜より今日まで一度も笑せひ〜吏無
ア〜に此時始て笑せひ御欣悦の色あ〜られる辰音春彦も公の御詞に
就て梅樹と立周て左見右看に。実も紅梅殿の梅に紛ふ方なれば感歎〜て
止ず。心ある下僕までも感涙袖を流〜る。是より菅公前に信〜て愛〜
ひ。御薨去の後神に鎮祭まつひ或人此梅の枝を折〜て御神託に
なさけあ〜折人〜〜〜〜宿の主ひすれば樣のくち枝を
と詠じ奉ひ〜太宰府の飛梅是なり。其後都の言伝に。紅梅殿の御愛

樹の内梅ハ一夜の中ニ雖ど接取られ影ばかりなり櫻ハ枯果残るハ只松ばかり
なりと宣へば菅公嗟歎給ひ絲ゝの御歌ニ曰

梅ゝ咲べきさくらハ枯る世の中に松たゝるこそはれなりけれ

斯絲ゝ咲せのひるに其翌朝庭前に一木の松生出る辰音春彦公下の
人々又大に怪とよろこぶる是も都紅梅殿の御愛樹の松に幹も枝ぶりも
彷彿られば菅公言上なるに公立出て見給へば紅梅殿の松に紛ふ
べくもあらねば奇異の思ひをなし給ひ梅と共に朝夕目なれ愛し給ひて
配所の徒然を慰め給ひ公の御跡を追来り我に代て追松と呼び給へと後
世に伝へ何時か老松と文字を換る斯て延喜三年正月の末つかた菅公
御異例に深き病ひ給ひ辰音春彦大に驚き郡司泰民部と商議
遠近に良医を求て御薬を勧む神佛に祈誓して日夜御本復を祈り

給へども墓々しく其験もなく日ハ過り月に成ぬ二月の上旬に都に出置の小嶋
田忠臣下向して配所参上られば菅公近く召れ珍や忠臣予が都を出し後
朝廷に変ゝ義なく主上ハ御安躰に在すやと問せ給へば忠臣ハつと御答へ
置に平伏て涙ぐまれ君さらぬ体にて頭を上給ハ御安寧に坐ますとも
左大臣殿一人政を執行給ひ僻吏多く万吏の訴紀滞りがちなる
都鄙の人民歎うずとく者なく我君都を出給ひ後左大臣殿の命として御
門人方も流刑に行んと沙汰あれども左府の御舎弟大納言忠平殿貞信公是
を練止られ給へども其儀ハ止給へども御門人達も其より後難を怕られて御
堂姫君の御殿に参らぬ人も希に成り行ぬ彼大納言忠平殿の御所に
音信の使者とて越れ御堂所に君に御別れ奉て昼夜御歎も深く
終に御患病に成り給ひ良医の配剤も其験なく去る正月十三日の夜基

我御枕頭へ召れ御香炉香囊小と把出させ給ひ。筑紫に在と我君へ妾が
記念に御賢せよとやせと曰ひ姫君達の御更をもそれ〳〵に御遺言なりたまひ
其曉終に眠り給ひ〳〵御終焉なり〳〵ひいたれば御葬式をなし果姫君達と御
一門方へ預けまゐらせ。漸都を発足仕り只今糸著いと言上涙をぬぐひ御遺
物の品〳〵我呈れむ。菅公御覧〳〵愁然〳〵と御落涙すり〳〵なると忠臣辰
音春彦們ともに御中を推量進せ声々を呑でぞ悲泣なる。菅公氣を厲〳〵
なれ汝們愁傷する更多と生死素り天數なり。妻の死沒も悔に足ず只歎久
〳〵に主上御年若く佞臣の言を信じ給ひ左府時平に政柄を抱せ給ふ更下民
の愁ひ朝家の衰とや成ん。古人も謂ずや悪人を國の害浅く佞臣は國害深
〳〵と。聖明の君も時平に政を委むぐ遂に不德の君とや称られむん嘘
是も天なり命なり。人力の私を以て奈何ともすべき。已乎〳〵〳〵と忠臣に向ひ
汝辰音と俱に都へ帰り。残る女どもの父抱せよ。且此一紙を予が配所にて金せ詩
文なり持くりて中納言長谷雄に遣せよ。即ち長谷雄へ遣せと消息に道ひ
〳〵齊世の宮大納言忠平へ呈する書翰をも封中に竜こうとて差出し給へば
忠臣も辰音も大に驚き忠臣先ヤ〳〵に御捉及〳〵なりい恐多くいへども。御臺
所御逝去まし〳〵なるを姫君達は御親族方へ預置其は君の御先途と見届
まゐらせ下向仕りいざ此御使は余人に命付られ其は御膝下にて召使せ給ふ
願ひ辰音を言と発〳〵其身不肖にへども君都と出るに〳〵時より隨従仕り今
日まで仕へきりに君先頃より今にて御不例にて〳〵せ給ふを見捨まり。爭う都へ
帰りいざ只此侭にて召使せ給へと歎き願れども敢て許〳〵むなど。你們が中処理に
似られども予が病も今は稍忘りて治する程あり。閑暇の配所給仕は春彦一人にて
支足なん。數多の女ども母を亡いて便なくぞ思ひ〳〵れぞ忠臣一人にて是不足

り此封を用ゐ於ハ永く主従の義を断ぜんと平只温順柔和の菅公申言厲しく曰ひ給ふ両人も其厳威に怕て再び御辞退申上る吏能なと不本意ながら已支を得ず領掌し給ふ。菅公色を和げ給ひ御一門方姫君達への御傳言と言含の御眼を給ふ事嶋田々々只八拝辞して春彦が後の吏どもとゝ〳〵頼み入る御封物を持して遂に方々筑紫を主て都へぞ上り給ふ

因に曰此時両人小渡しの御草稿八昌泰三年八月家集を献りの後配所にもり給る時までの御詩集なり。菅家後集とも菅家後草とも号て一巻あり其中三十八首ハ筑紫へ赴給ふまでの御作なり

菅公天拝山祈願　兎園去　渡會春彦忠實元去條

嶋田忠臣田口辰音己に筑紫を主て都へ上り給る後ハ菅公御居室に篝り何ハ志と細密と書記の春彦に命て彼飛梅の新枝と折

折らせ其に右の書物を挿ませ給ひ偖一七日が間齋戒して後春彦に向ひ予深く心願有て是より近き山に登り一七日の間祈念を欲せり最一七日の間ハ断食あれど食物を運ぶに不乃敢て你山登来る吏勿れと仰給ふ。春彦大に驚て申す。御症に成て以ても時今二月の半ば過ぬ余寒強く御不例乃御身にて一七日の内断食して山中に御笠童あゝ吏御身ぞあ宜しくるまゝ何吏の御祈願ハ存じ給ふとも今暫く春暖の時節に及びいざ待せよ。其内に御患病も治し給ふと練り給ふ。菅公敢て用ひ給ひ是你が知所にあらず。満願の後子細を語り申す色祈願の内ハ決して登山成不許り此言を用ひ登山せ給ふ予が苦心画餅となり願望不叶事を予山中の岩に首を觸て死を図り構て予が言忘却する吏あれと強く戒め給ふ。春彦深く恐怖し乃曰上ハ御願の満ぬ内登山致すべくいと領掌申上る。菅公今ハ心易しと思召浄衣と着換給ひて伴の

新枝を携へ給ひ配所を立出給ふに。春彦は覚束なふ其山の麓まで召連給へと
て強て随従しまゐらる。菅公を一座の高山の梵へ到り給ひ。春彦を顧給ひて。你は是
より還り予が留守を衛よ。先ゆもヤ宣せ〻ぐく。七日満ずるまで登山ふせそと誡め給ひ
袂を分ちて只御一人山路を分登り給ひ。春彦は背影の見ゆる限り見送り進
せ心恍惚として山上を又上停立ぬれども。御誡強ぬれば山へ登る更能ど為方なく
心ならずも配所へ帰るとは。君の御身の上を煩想て起居安うず。夜も枕ふ就ども
目も合ず終夜嘆くして夜を明し。明まで又彼山の梵へ到り給へ御姿の見ゆる更
やと。東西南北と路も無山下と回り給れども。御姿を拝ふる更能ず十計尽て
配所へ還り。又氣遣しさふ山の梵へ到り。如此七日の間往反數回をぞ労しまゐる。去程ふ
菅公は險峻なる羊腸を分登り。辛して山頭へ到り給ひ。一塊の巌の有ぬれば其上へ登
給ひて携へ給ふ所の新枝ふ挿し願書を天ふ捧げ御足の左右の大指むうふて翹まゐ

皆く天を拝し給ひ其後御眼を閉一心不乱ふ祈給ふ何更の御願ふいざ不知ども。
菅公は天性虚弱く在せるふ。断食不飲ふて。まゐる巌頭ふ翹ち七日七夜の間刹那も
懈怠なく祈給ふ更実ふ難中の難ふて勇猛強勢の荒行者たりとも半日も堪る更
難る程しうる丹誠を高天も感じ給ひ七日満ずる暁天地俄ふ震動して雷電
鳴閃くと等く一陣の旋風吹発り捧げ給ふ告文を天上遥ふ吹上御手ふは梅の新枝のみ
ど残り給る。菅公御喜悦針ふず。今こそ道真が大願ど皇天納受し給へりとて天
ふ向ひ九拝し給ひ巌を下り梵へ下り給ひ山下ふは渡會春彦疾く待受け
し更ぬれで大ふ恰び其御安躰を賀しまゐる。随従して配所へ還り御湯漬ふど式勧め
まゐれども菅公些も用ひ出ぬ。御縟の上ふ卧給ひ忽盗して眠ぐ〻疲去なし給ふ
ひ給る。時は是延喜三年二月二十五日なり。春彦斯とも考ず御疲労ふて御寝給ふ
しと心得其侍御傍ふ直宿しまゐる日も暮夜も初更ふ及ぶども起ふぬれば余りふ

不審さち怕ゐ〳〵御枕頭へ膝行して窺ふに御寐息もあらぬほど。大ふ紛りこつと御手を採て脈を診るに。御手氷のごゝ冷きり六脉已に絶ぬ。茲に於て殯宮と〳〵て驚き騒ぎ慌だ急ぎ下僕を呼て郡司民部が邸舍を造らせ斯と報ぜゝめ給ふ民部も大ふ驚き醫師を引將て馳参り薬湯を用ひ灸ぐて百般扱ひまれども再び蘇生のまぐもあらぬ。畏こ同涕泣の涙を灑ぎ只歎息するばかりなり。全て春彦八月日とも憑みなし。公ふ別を進ぜ悲傷一方ならず我を忘れ声を放て慟哭〳〵と民部是を練啊。先急使を仕立て菅公御薨去の由を都へ注進。偖御屍を棺に収め御葬式を整へ御棺を車に乗せ御葬の地は太宰府の四堂の側と定め。配所を出し。御車には春彦付添四人の下僕是を押。民部時員も是勢ふて御車の前後を警固し。四堂を臨で送りける。茲に菅公薨去しゝ事を維が言傳るとなく遠近の人民皆知て悲泣せざる者なし。御葬式を拜せんとて路の両側に群集し涙を流し佛名を称て拜し。斯て御車を押往ところに途中に於て御車止りて些とも動ず是何なるぞと是勢の者力を併せて押どもく。大盤石の地より生じたるかと。すも動ざれば春彦民部と相議し。御車の此地に止りしは此地に葬まよとの御更なるべしとて。遂に御車の止りし地に葬りまつる。今の神廟の地是なり。斯て御葬式も相済れば民部は従率を將て帰り。菅公に従ひまして筑紫へ下る。四人の下僕も已に故郷へ帰りぬ。只春彦のみ御墓の側に庵を営み喪に籠りて朝夕御墓を掃浄め。水と手向花を供し。死に事る事生に事るが如し。郡司民部其誠心を感じ。米薪を贈りて飢渇を扶けり。彼孔門の子貢が孔子の冢を守りて家の上に盧を造る事六年。我朝の良岑宗貞も仁明帝陵墓を守る事三年人皆其忠節を貴美せり。渡會春彦も是に先哲に劣らず。其身菅家普代の臣にもあらざれど。菅公御誕生の始より筑紫に下て御薨去に

まで昼夜勤仕り猶御墓を守りて盧する吏一年延喜年二月廿五日菅公
一周忌の御命日ふ當てさして病ふ溺るゝもなく沐浴齋戒し中臣の秡を行ひ
安坐して卒去し給る行年八十五才とぞ申へし後神ふ祝こめ菅神の摂社とする
白太夫の宮ハ此春彦が吏なり。緘ふ希代の一人なりゝ

因ふ曰菅公の天を拜し給ふ山岳土人天拜山と号彼岩を天拜岩と稱り
寛平法皇築雙岡　法性坊夢謁菅公亡霊條

惜哉北闕乃春の花不帰水ふ従て流奈何せん西府の夜の月不覺して虚名
の雲ふ入さゝゆ朝廷の忠臣と呼れゆひし右大臣菅原道真公五十九才ふて如月の
梅花と倶ふ散て西府の土ふ帰ゆひし吏早く都ふ告そ〻ぐ。姫君達の御愁傷を
中ゆ中く疎おて御一門を首無縁の月卿雲客數あるゝぬ市人農民まで老となく
少となく惜み歎くゝ八無アるふ只時平方の輩八菅公ゆ左遷思免乃紀ふ

飯浴あるゝ猶奏の罪露見し。如何なる御咎を蒙らんも量ぶと皆安心ふ
なるふ己ふ筑紫ふて薨去あるゝと雖時平ゆ光定國ふ下の奸徒目の上の瘤と除
し心地して大ふ怡び始て枕を高ふ各参會て酒宴を催し賀を演てぞ楽なる
茲ふ寛平法王寺を先ふ菅公の左遷を申宥んと御惠ゆ兼ず御参内なるひしふ
奸臣們ふ妨げられゆひて。本意なく還御なるひし後ハ世界憂よふ思召るゝとゝろ
菅公終ふ薨去あるゝとゝ聞せゆひて恐妻も御衣の袖を哀涙ふ浸しゆひ。ぐ時平
以下の逸者を恨み悪ひ都の方と見も嗔嗤の種なりと思召仁和寺の前ふ山を築
せゆひ。其築山三峰なる代ふて。世ふ雙岡とぞ呼名し給。是仁和寺より都ゝ
見えざる爲の目隠しなり。斯て法皇ハ御室ふ閑居ゆひ朝夕菅公の菩提を弔せ玉
ひ御座の側ふハ菅家持歌の書物を置せゆひて御後世の折ハ是を御賢ひ菅公
ふ御對面なし給ふ御心地おて御心を慰めゆ雖有ども御吏なり。菅公の御霊も

さゝを忝く思召らんとぞ覚へたん侍る。菅家の御書物とやハ
菅家家集 和歌一部　菅家文章 詩文十二巻　月後草 配所御作 詩一巻
菅家万葉集 古歌を御自作詩を合せ二巻　文徳実録 一部
類聚國史 二百巻　文選文集 菅公加点一部　以上
其後法皇朱雀天皇の承平元年七月十九日仁和寺小於崩御なりしかゝ
崩御の後八世八御室御所の麦と御門跡と下まりける。是ハ御門跡と言麦なり
因小曰後代小至て八門跡を宦名の如く言ふ後年追く門跡と称する宮方
数増たり其大略を
叡山三門跡　妙法院宮　青蓮院宮　梶井宮
三井寺三門跡　聖護院宮　圓満院宮　實相院宮
東大寺門跡　勧修寺宮
奥福寺門跡　一乗院宮　大乗院宮
醍醐寺門跡　三寶院宮
右の外　大覚寺宮　安居宮　竹内宮　智恩院宮
関東日光宮　等其余数多有又准門跡と称するも麦りれども略之
菅公御薨去あって後天神地祇朝廷の忠臣の冤死を怒りのしゝん。洛中洛外
厄難數度小及びけり。古語小曰一夫怨で三年登ず。一婦恨む百日雨降ずと謂り
是万物の長さる生霊を苦まちむる麦を。天地ともか怒りの麦故なり。増て況や菅公の
如く大賢人を困め進せ小於ては。先其初を延喜七年八月九月両月小洛中洛外の
神社佛閣の境内小植さる梅櫻桃海棠と着て。山吹杜若小下の草花小いる迫桑く
花咲れで是ハ珍しく東小かゝて貴賤とも老若男女の差別なく群集して是を見
回りける小心ある輩ハ眉を顰め。例年皆咲とりくき年素の麦あれど。是ハ夫とも麦

菅公

菅公
筑紫
天拜山
祈願の圖

変り秋の半ばの草木一日に花咲き実前代未聞の珍事なり。此事何なる世かなり往らんと私語合り。帝も殊に天文博士陰陽博士に考させ給ふに何方も重大の御慎みて殊に公卿の中に凶変のいでゝと勘文を上りて奏聞し給へば主上深く怕れ給ひ宸襟安らず。諸寺諸社に宣命あり災変を禳ひ給ふ加持祈請を修せらるゝ。其中に睿山の法性坊尊意僧正とは智徳兼備の名僧にて天台止観の奥旨を究め三学三論八宗に及び一切諸経の深理に通ぜざる所も無りければ一山の僧徒推尊し山門の学頭とし帝も深く御信仰在り天台座主に任じ給ふ。今度勅命に消災の加持を修すべきの宣旨を下され給ふ。此僧正は菅公と師檀の睦び深く公の御在勤中は互に往来して詩を作り書籍の討論など仕合ひ給ひ。菅公の左遷せられ給ひ且夕歎き給ひ何事折を得て帝を宥め菅公の左遷息免を願ひ奉らんと思ひ給ふも縁者朝廷に充満て其便を得ず徒に年月を送り内裏に菅公怨霊の祟りを成すと聞えしが僧正哀悼の涙に三衣の袖を絞り会者定離の理りと観じ給へども亡跡を吊ひ進せんと朝夕妙経を清浦に誦し給ふに禁廷より災厄消滅の加持を修すべきの倫命下りて僧正勅命に従ひ別所の菴室に閑籠り丹誠を抽で加持の修法を行ひ清して御座の所に夜菴の扉を敲く人あり。僧正数珠の手を止て誰とやと怪へ扉を開て月影に其人を見れば豈図らん去ぬる延喜三年二月。西府に夢去り給ひし菅丞相衣冠正しく笏を把て停立し給ひ其顔色は憔悴して夢の如と傳ふ。素より師檀の契深き御更なれば悲哀に堪ず。せめてもの後世佛果を得の為に朝暮御跡を吊ひ在し変ねば對顔をなし給ふ不思議さよ。先に此方へと請じ入賓主座定まりて有合拓餡を出し湯を進ぜ

られ偖今宵ハ何のくめ光臨なりしやと咨ふに菅公答のたまふ。緘ハ弟子道真無実の虚名晴ど五年以前西府の雲と消五温の形を土中に朽果れども。一念の霊ハ尚陽土に遺まる。抑道真不敏なりとは雖も君王の御為毫髪も私心存せず。心を小己に克て。御代をしたに奉舜の化に比し。肺肝を確し其甲斐なく。終く香の為に叛逆の汚名を称られ無享して父子五所に謫せらるる。其恐無おぼれども是ハ時の不肖身の不運に據なれど露許も君を恐るる心ハいかでか。然ども時平公下の輩徒君を言惑し道真を退し罪を。天帝敢て怒ることなくして帝闕に災厄を降し侵臣を罰しむるなり。然て王宮に天災の及ぶ期に臨む其災変と禳んと朝家より尊師を召るる吏ハ何ぞ願ハ吏と左右に托て下山なるべし。天威に逆ひ吏多れ。此義を告まんあ仮に形を現し尊顔向ひいかりと曰ひられ。僧正驚ひて仰らるる所理の至極に。天帝侵臣を罰しむるとハ君より貪道を召るるとも二度

までハ堅く辞して下山仕るべきなれども普天の下王土に非るハなく率土の賓王の民に非るハなし。且我山ハ王城鎮護の為に建置る所なれ勅使三度に及びて召に應ぜざる吏能ぶに。斯程の理ハ凡庸の徒も弁知ん者。況や貴卿に於ておやと仰るに菅公再び仰らるる御言なり。勅使をして氣色に損ぜれ。菓子臺の柘榴と採て噛ぶれのひ妻戸に向て吐かけ吏ば。柘榴ハ忽ち猛火となり。妻戸に燃付焔と焔なりるを僧正ハ公然として強て驚ぶる。手に灌水の印を結びのふと等く。今まで燃て一妻戸の火消無して消。其煙に紛れと菅公の姿消失のふと思ひのまに俄然として御眼覚是一場の夢に。ぞ有る。僧正奇異の思をなすに我菅丞相を追慕する心深なるへくるる奇怪の夢を見ること是思夢なる者。然ども内裏の天変を示し下山を止られ。然て考るに実夢にやと。虚実両端を定かるに。又加持ど修せられ貝原先生の著されし太宰府天満宮故實記に曰菅公の霊廟山の法性坊の行

ふつゝ。我天帝の命を受て雷神となり。内裏へ落て絶奏せ。徒を掴殺へと欲す内裏より召さるゝも師下中の臣列て辞する事能ざるよ。咎れ。菅霊怒りて松梅の埴と妻戸吐けられ妻戸焼て灰と成。師濃水の印を結んで是を消れゝと書傳られど甚だ信じ難く紀綱ふて恐るゝ八後世の虚説なるべ。菅公寛のさめ不左迁せられ給ども天命ある所悟りして師も君を恐の言ず。茲不何ど死と雷神邪神と成て天命紀是菅公を余小崇奉て種〻の妖怪を殺げ邪神となり世の人神威を損を理ふて最も恐ある事なり。内裏の三度火焼。時平公下の死を善せざりし天道菅公の忠誠を感じ。冤と雪ぬ無辜と露さんとあふ怕紀天公と降り給所ふて。敢て菅公のなり給ふ非ず。絶者の徒雷ふ撃れ或ハ死せ。も天道悪ふ殃へ給ふ理ふて忠臣無二の菅公を絶奏せ罪大ふ。て天殊ふ遭るなり是自業自得とゝ。ゝ。心ある人さとゝ。ゝ。弁へ。ゝ。紀東ふ。ゝ。此統誠ふ公編と謂べし。世上ふ菅公八雷神ふ成給へと思人多し。甚だ紀僻変多年素ゝ貞原翁の卓見ふ伏すとゝ。ゝ。茲ふ松梅天神の一條と載るゝ。古くより書傳へ人〻の能知る。統なれど是を捨ず。夢ふ托して織者の責と塞

洛中天変内裏雷災　奸徒雷死法性房行方條

延喜七年も暮ぬ八年の春ふなり。紀ども何の異変もなく紀是全く加持祈祷の功ふ。る所なると上一人より下万民まで安心〻ふ其年の秋八月十六日俄ふ暴風吹出し。洛中洛外とも大木と根ふ〻吹仆し。堂社人家の屋根を吹捲り。端〻の小家ゝ吹倒さゝも麦〻加久ず。大雨降出て賀茂川ふ洪水溢れ川下の人家百四五十軒忽ち水のゝ。ふ坤流され溺死する者数〻。牛馬雞犬の水死する幾千も数ず是紀ゝ希代の天変なると上下顔如来怕惑ふ所ふ午過頃より雷電凄〻く鳴閃紀白

昼きわめて晴夜のごとく風雨倍屬し成れば貴賤とも魂を消し女童泣叫ぶや世界も滅し尽くすかと危ぶる。殊更内裏に雷鳴して驚く雷の落る度毎に敷ちて。誰が言出せしか此天変無罪右大臣殿を左遷まるゝも菅公の怨霊の崇なりと所なりと言罵り。百司百官君と寧穫しなんとせど。周章狼狽して逃遁ぐる。中ほど大納言清貫も菅霊の崇なりとて大に恐怖し。手上の御座寸常寧殿へ逃避んと後涼殿の廊下を走り。眼前へ一團の雷火噴と落るかと清貫さらと魂断て屍居ふるとと行る其内ほ水干の袖に雷火燃付れば盃酒を周障大を消ん廊下を辷び回り。殺〳〵と叫所へ再び霹靂大に震鳴清貫が五躰の上に落るかと。何ぞ堪る。首も手脚も切〳〵に成燻り焦て死る。目も當られぬ風情なり。右中弁希世周障盃を大庭へ逃下るに雷火のごとく自を焼て仆死。負文は勇氣を以て難を逃れんと弓に矢を番へ引張て逃行を雷神近付き

蹴殺〳〵。死蔭連焔に焼むせて死亡。其命時平に一味せし輩は怒り雷の為に撃まるゝ。弥菅公の祟也と恐惑ひる。左大臣時平も今度の天災を菅公の祟かと一途に思ひて恐懼しかの奸智と回。光定國菅根に向ひ菅亜相在世の時は帝と重臣に敬ひ奉過られば其亡霊も王體に近付奉はよもあらじ君に引とて居ぬ雷難を遁る者と言れ。皆元とは意。帝の御座へ参り玉體を守護しまるとて名を呼。四人も御衣にとり付て戦慄る。素り雷災は菅公の霊の為とぞ。されども流石十善の天子の威に恐れ玉體に咫尺奉ふれば。諸者の面々も僕僕に雷難を免れ。されども風雨雷電尚止ず。日は已に暮れども燈燭点ずる人もなく。宮殿皆暗闇にて只透間なく内く電光の影凄く。此所彼所に泣叫ぶ女房上童の声叫喚大叫喚の地獄も斯やと怪まれ。左府時平心付帝に向ひ奏る。暦山の座主尊意僧正を召加持きまゐらせ。天変の止む事もいと速かれと願ひ。帝実

其義を忘れて急ぎ勅使を遣はし尊意を招き寄せと紀命あり。左府奉り心利く人を擇び勅使として山門へ発ちしある。此時夜は暁ならんと時平を思惟ら勅使途中にて遅滞す。東もやとて。又續て二番手の勅使を遣はしたれども尚心安堵ず。又々引續て三番手の勅使を発向やられる。去程に一番の勅使風雨を犯し秘馬に鞭を加て飛ぶ如く睿山へ蒐著法性坊に入り勅命を述て急ぎ参内あるべと急ぎ〻る是より前に尊意僧正浴中の夫を見て去年の夢を思ひ合され斯て禁廷より勅使を差て召るゝ。然ども夢中の言分つゐに翻されず。一應の御召あれど辞退して下山すべと菴室に閉籠て御座る。果て其翌朝遅〻勅使入来あり。大急ぎ参内し天変の鎮る為加持せらるべと倫命を傳て下山を促し給れ僧正應て老僧頃日所労にて此菴室に引籠り下山し難く無益なる勅命を黙止難ぎ。此菴室にて雷雨を鎮る秘法を修しの後此旨奏聞せんと申れ勅使推及し。御所労といへど一應の御辞退さる事ふしぎ。今度の天災は尋常に異なる。菅公の祟なれど。自他とも僧正を伴ひ奉るべき事なり。菅公の祟あれば僧正猶辞して参内あれと乞れる。僧正猶辞して参内あれば。菅公の祟なれば天帝の死罪なれば拙僧も修法して正ぎ〻む。内裏にて修するも當山にて修するも同じ理なり。先く御還有て可然奏聞し給へと。敢て下山すべき体見えぬれば勅使困て其人奈何すべきと當惑あり。内又三番手の勅使混沌に成て弘著参内と促す事ム前の如し。されども僧正先の〻く曰て下山を固辞せ。内間もなく三番手の勅使急ぎて蒐著参内を乞事頻なり。僧正も勅使三度に及び上は辞するに詞なく此上は先三人の勅使に先立て其身は車に乗て睿岳を押下る。鴨川を一散に押行くに早鴨川も洪水漲り水勢岩をも流すべきに自浪も有様

を船にて猶渉らるゝ人々なり。増て馬車にて越ん事難きまゝ手ふれば三人乃勅使も悩ませて手綱をひく車と推人夫も水勢に辟易し。互に面を見合て如何せんとぞ思ひける。僧正御賢にて此も怕る色なく人夫に向ひ仰に患る事なれ我路を開き得ざるべし。只水中へ車を乗入て三使の車の後に續くべしと。車の内にて咒語を唱へ印を結ぶに奇あるにも漲り溢れ川水忽ち両段に分れ中に一條の陸路開けり。衆人是を見て嘘と感賞し。実に奇特の法力なり。帝の御信仰在すも理りなりと。勇み猛き生車を押まるゝに勅使感嘆し續て駒を進め。上下とも安く川を越果れば。後に旧の大川となり白浪高くぞ立ける。斯て僧正御参内あって王座近く勝行し。先王體の御姿を祝し奉れば頓て水晶の珠数を繰り大威德の法を修し給へば。不思議や今迫鳴閃き雷電忽ち遠去り。遥に紫宸殿の上に鳴裏れけるに是に依て主上ゆ〻唐慮を安んじ給ひ時平以下も溜息吐て蘇生る心地せられけり。夫程に尊意僧正猶も雷災を鎮んと紫宸殿へ入て祈り給へば雷も清涼殿の上に鳴清涼殿に移りて修法あれば梅壺梨壺に鳴裏れ七十二殿十二坊を追回りく根限に祈り給へば主上は菅公を左遷し給ひ更に深く御後悔在り菅丞相及び子息達の左遷一件の書物共取出させて悉く焼捨させ給ひ綸罪恩免の勅宣を下され且左大臣に増官なし給ひ倫旨を賜はりて雷神も是に依て怒を和げられん漸に風雨収り雷鳴も止るに君を首とし公卿大夫下官に漸く心穏安んじ互に恙なきを相賀し奉る。尊意僧正猶も災変を懼んと内裏に参りて祈の擅を設け一七日の間秘法の加持をぞ修せられける

時平患奇病薨去　光定國菅根変死洛中洪水條

本院の大臣時平を先とし光定國菅根に時平に依て不思議の命を助り且法性坊の行力左遷恩免の勅紹に依て

てんべんまづま
天変鎮りしくぞ。列位安堵の思ひをなし。今更菅霊を宥人しゑ。帝ゑ奏して菅家四
人の子息達の流罪を恩免在て都へ徴還しまと勧まりれむ。即ち左迁の罪
恩免の宣旨とぞ下される。鈍ゑ土佐国へ左迁せられ。長男右大弁高恒佐渡国へ流
されぬ。二式部大丞景行讃岐国へ流れぬ。三男蔵人景茂ゑ上三人を皆其国の
配所ゑて御逝去ありぬ。西へ本官ゑ還し。猶官一階を加へ。只伊豫国へ流されぬ。四
男秀才敦茂のみ存生ゑて駿河あり。菅原の名跡を嗣ぬ。斯て其年も暮明る
延喜九年三月本院の左大臣平ゑ奇病ゑ染て疾病となり。昼夜怪しく苦しみ
悩られぬれば。御墓所を首ぶし。御内人親族方も大ゑ歎れ。良醫ゑ委て醫療手を
尽し。緒社の神宮緒山の僧ゑ命じて加持祈祷遣る所なく。修せめ。れども露斗
も験なし。漸くゑ形容痩衰果発狂なり。須波ちき菅丞相ぶ来りて予と将行んと
するぞ。嘻今雷神ぶ予と曳裂人とするぞ。言上殿中と東西南北と巡回り狂ひ
問られる。是真の菅公の霊の祟となり。ゑ。ゑ。自身我と求り奇病なりと
其故を去年大内雷災の砌ゑ心ゑ菅公の祟なりと思ひて恐怖の念骨髄ゑ徹
り。其後ハ昼夜菅霊を怕る念止時なく。遂ゑ奇病と成なり。彼盃中ゑ蛇有と
思ひしより心ゑ病を生じ。角弓の時縛の影なりと歩て宿病忽ち愈しと同じ理也
然ども自身も想より生ぜ病なると覚ず。増て余人を猶以て菅公の祟なりと思ひ
結此上ハ当時無双の験者と安えし。浄蔵貴所を請て加持させゑ。恐霊の退
散する事も有べしとて。浄蔵貴所を招ぎ。左府の奇病平愈の加持をぞ修
せられる。此浄蔵貴所とハ三善清行の息男ゑて。幼稚の時より仏法ゑ心を傾け
出家して普く経論を学び究め行徳衆ゑ勝れ。一年都八坂の大塔ゑ参れば。浄
蔵毘沙門天の法を修して是を祈られるゑ。一夜の内ゑ塔の歪整りぬるゆ。其奉
て其法力を感賞しる。名僧の丹誠を抽て加持せられる。大臣の狂病

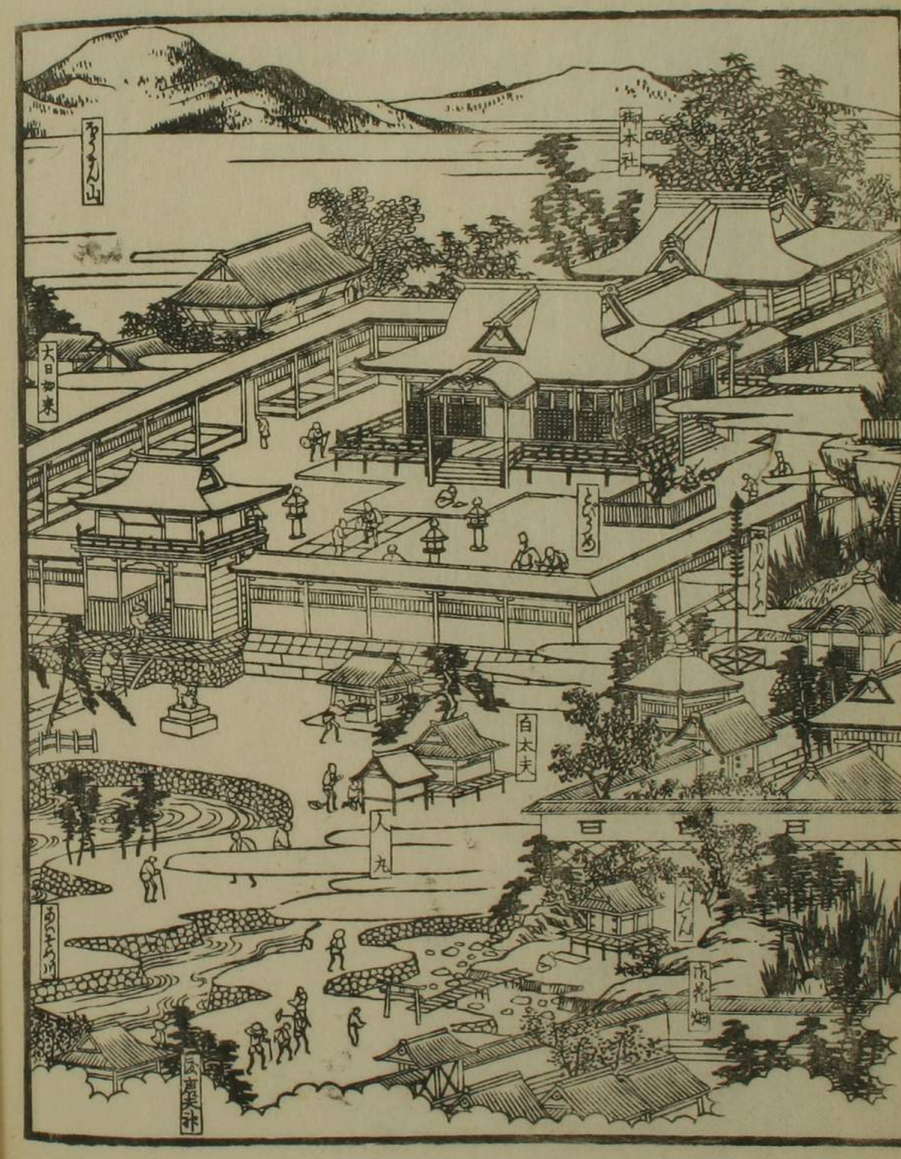
次弟ハ鎮り狂ひ回らず吏止られず。舘の上下稍心を安ん。浄蔵の行力と最頼もしそ思ふ。されど天の責る所の患病なれ。左府ハ身體痩衰飲食俱ハ癈り病床ハ日卧痙の喚く如く喘る。浄蔵ハ昼夜加持の擅ハ在て法華経を讀誦せられるハ余り舌の乾かれ。湯を飲んと皆く経を讀止る。時ハ大臣の左の耳乃孔より青色の小蛇三寸許首を出し。舌を閃て座中を見回る。是を見て侍衆侍る女房近習ハ大ハ後死皆身の毛を竪三日とも見る者なく。兎角ハ成て戦慄々り。浄蔵も殘無ふ。道徳勝れ勇猛の僧なれ。此も怖ぢ又法華経を讀誦せられれば蛇ハ耳孔へ退入る。是より浄蔵一日ハても讀誦を止られバ件の青蛇耳孔より首を出し座中を見回す吏公前の如く経を讀む退入誦し止で出る。ハそ幾日の浄蔵も憑果根氣を疲しとまてあまるハ遂ハ時平大臣蛇の出初し日より第三日ハ大ハ煩悩し虚空を摑で狂死せられる。天罰の程ぞ恐しきる

時ハ年齢三十九才とぞ。即墓側室の悲歎ハ尽む更なり。子息八条大将保忠曰中納言敦忠其余の一族縁者の人々悔歎けども帰るべき道ハ無れ。泣く屍と擔ハ収め送葬の儀式執行ひ一堆の塚の主となり。斯て初七日ハも成れ。即臺所を先々子息保忠敦忠其余の女房達雑掌一門の人々ハ追薦せられる。墓の上ハ五尺余の青蛇蟠り居て人々の面をあらあらかづ咲く侍なれど女流の輩ハおそれやとまぎりて袖を覆て逃出るもあり伏博もあり。保忠敦忠ハ下ハ大ハ殘死悩惑へり。只時平の舎弟大納言忠平の〻勇氣ある人ハて此も動ぜず武士ハ指揮て蛇を取捨させんとせられるハ蛇ハ已と這去て更ハ行方を知ずなりぬ。是ハ後て各廟拝終り舘へ帰られるべ。二七日及び七日又皆ハ揃薦参せられるハ此度ハ墓上ハ蛇の在事前の如く。去ハ先日より稍長大ハなりて蟠り居るハそ女性の面々ハ前ハ倍して殘死恒也。此後ハ廟参する女性ハ多り〻

男子の名ハ流石女〻〻廣桑せざるも人間悪〻とて恐怖と懐おぢ七日〻〻ハ廣桑
するハ。いろも塚上ハ蛇在て取捨んとすれば己と去。桑結する度ハ蛇おずとして更ず
出ず。大ハ困り果。後ハ墓所の罪ハ高塚を造り。厳〻〻を構て小虫も這入ざ
き事ハ〻〻監率と附て守せ。結て桑結せ〻〻ハ。天より降る地より生る。蛇ハ
尚廣上ハ在るぞ不思議なり〻〻。人をとてあり。奈何せんと商議する小一人の曰名
香を不断炷と云ハ蛇来るまじ。是緒虫ハ香氣を嫌ひなりと。実もとて巨大なる香
炉ハ大を不断炷て伽羅沈香白檀の類を堆高く盛上て炷ゆれば。其香氣遠近
ハ薫じて得も不言ぬ〻ハ馨〻なれども。件の蛇ハ猶廣上ハ在るハ。是も徒事と成
〻〻。又人の曰墓目鳴絃の法を行ハ。邪魅怕て近寄べ〻ずと云ふ。射術ハ
達ハ命じて。廣所ハ於て墓目の法を行ハ。むるハ其絃音ハ應じて大勢鬨を発ハ如
なる声を発し遠近ハ震ひ。蛇ハ曽て出止ず是も其絃あ〻とて相止道德ハ

聞えある僧綱ハ法華経を讀誦せ。神官ハ祝詞を上せ。百般ハ〻て除んと
すれども蛇ハ退ず。尽七日の須ハ長一丈余太紀更大行ハ増紅井の舌長く内へ入て緒
人を見る〻〻ハ怕ぢ〻〻者なり。今八百社尽て塚の上ハ一箇の社を建ハ。彼蛇来
ハ此社の内へ入ざ。ハ亜位汚ぢて堅く鎖固る。今の世塚ハ卵塔を云ハ是
より始り〻〻と。斯ても廣桑の毎度ハ蛇ハ塚上ハ在るハ。男子と云ハ後〻ハ怕
て桑結する人も無り〻〻。去程ハ延喜十年ハ成るハ其年の春大納言源光悪魔
を患て。醫療手を尽せども不治。果ハ面部罪股腐爛して遂ハ逝去せ〻〻。又其次
乃年和泉大将定國俄ハ発狂〻〻て自己太刀と抜て我身を突串て狂死
藤原菅根ハ菅霊の祟を怕て身の無事を祈んと馬ハ駕て賀茂社桑
るハ途中ハて乗馬狂ひ刎るハ。菅根鞍ハ堪得ず横さまハ落馬。馬の為
ハ踏殺され〻〻。箇様ハ菅公を怨言せ〻〻人を悉く変死〻るハ。天の罰なる

筑紫太宰府天満宮圖
九所
宝殿
うんらく古
文殊堂


かすがん山
梅木社
大日如来
白太夫
八丸
八幡宮

とゝろとハ不知世人皆菅公の崇なりと思ひ恐れあへり。然るに時平乃子息保忠敦忠両人も奇病を患て死し。尚ほ時平の妹なる女御隱子も患病ふ依て薨じ給ひ。ち續て春宮保明親王時平の甥も病死なり給ふ。帝の御歎大方なゝず。是も菅霊の所為なりと思召返さゞるも菅公を左遷し給ひし吏と御後悔在し。筑紫へ勅使を下され菅公の霊を宥られんとて正二位の宣を贈り給ひ神ふ鎮祭り大富天神と神号をさゝ賜リけり。然ども天帝の怒尚止ざりけり。延喜十四年甲戌三月下旬洛中ふ火災発り。上八条より下八条まで東八川原より西八大宮通とで一四ふ焼亡し僅ふ内裏ハ焼残れども内裏より上の人家も残少ふ類焼し。三日三夜の間火鎮らず。さしもふ廣き平安城も忽ち赤土となり。公卿殿上人も住家なく。ちゝ武士市人共山林へ逃入るハ近国へ逃行も多く。親を失ひ子をとゞ子を失ひ夫を失ひ妻ふ別れ。尋ね迷ひ呼ばゝ泣ひ光景阿鼻焦熱の地獄も斯やと怪まれる。是と

さく希代の大変なりと怖る所ふ同年六月初旬より大雨降續き白昼も黄昏の如く。市街ハいとゞ春の大災ふ家造も間組の仮住居あれど雨の不漏家もなく。大ふ困り果る。稍く中旬後ふ雨止天霽るゝ少し心を安ずる間もなく。忽ち賀茂桂ふの大川より洪水溢て。洛中水の深さ八尺余ふ及び水勢家を漂ハし杭木竹ふと押流し。水の来る度ひ紛なく疾くなれど。牛馬雞犬ひゝめ更なり。老人女ふ児の仆ハ水ふ漂ひ流れ溺死する者何百千の數を尽ず野武士強盗ハ混雑騒動の紛ふ乗じ。金銀財宝衣服ふと奪ひ掠て逃去り官よりハさる狼藉をも防ぐの暇もなく。其錯乱筆紙ふ尽し難し。適水ふ流れざる家くも床より上へ四五尺も水築られど。屋風縁も沾爛し障子も壁も骨むろこと成。家内の男女ハ屋根の上へ逃上り炎天ふ照蒸れて大ふ苦し。暑ふ中て疾を発するも少くず。春の火災とハいへ又此水難ふ遭吏前代未聞凶変なり

その如何成行世の中ぞやらんと時に古の空海和尚の如く名僧あるべし。火災、洪水をも法力を以て鎮めまもるべきなり。今の世の僧は官位衣服に尊げに見えんと、凶変を祈防ぐ程の名僧もなしと呟く合ずる事なり。空海が著述せし書籍何おびただし。宮庫へ納むべしと勅詔下りぬるに、臣下奉りて東寺の僧侶に宣旨の趣旨を傳へられむ。山岳に喜悦の眉を開く。直言宗の美目是に過ぎて倉廩を捜し、空海師十八才の時述作有し三教指帰を先として代々の著書、王造と題せし假名草紙まで輯て是を献じぬる。依其書を尽く朝廷の宮庫へ納めしめむ。吾朝に名僧多けれども如此上天子より下万民に仰ぐる迄末世の今も猶尊信する空海和尚の法徳こそ又類ひなけれ。

菅公贈官賜神号　延喜帝御讓位四海太平條

延喜帝菅霊の崇と鎮ぶん為に空海和尚の策文を不遺大内の文庫に納めしめ給へども猶世上穏ならざりけり。延喜二十一年に空海和尚に弘法大師と諡を賜り年号も延長元年と改元し給へども猶内裏に地震し就中五条より下八南北三十余町東西二十余町が間人家を揺崩し神社仏閣を傾覆せしめる。按ずるに是先年の火災の時焼残し所なるも不思議なり。其物音の凄じき事世界も滅却するとぞ疑れ老人児婦女の逃後し輩は壁に撃て棟柱の倒るるに中て死亡する者凡三千余人に及ぶ。是も菅丞相の怨霊の祟なりと言触しられ、主上より勅使を筑紫太宰府へ下し給ひ菅廟を新に修理せ給ひ、八月四日約て祭禮を執行めしひて此年後例年懈怠なく祭礼を執行べし。勅詔ありぬる由、此年と始めて例年怠ず執行るる時に勅使神殿に昇て拝礼し敬て宣命を續上られぬる。其後の中に社前に一面の瑞石現れ面玉盤のごとく石面に七言絶句の詩文字鮮やかにえり。社司大

に送れる勅使に斯と言上されぬ。勅使も奇異の思ひをあり社参し是と續ける

昨為北闕被悲士上　今作西都雪耻尸上
生恨死歓其奈我　今須望足護皇基一

とあり。勅使此奇瑞を見て感涙を流し偖は菅霊怒を鎮めんと深く神徳を仰ぎ敬ひて都へ還上されぬ。

因に曰其後一条院の御宇正暦年中に菅原為理を勅使として菅公に正一位太政大臣の官を贈りぬ。天満大自在天神と神号賜りし二十二社の數に入りぬ。是より緒岡にも漸く社を建て木像を彫り或画かれぬ。敬ひ祭る所數ぞ。都北野の天満宮は其始天慶五年七月十二日西の京七条に住し綾子と云女に菅神御託宣すらく。予昔世に在しかむ。北野右近の馬場に遊れ洛の中に閑に勝る地彼所に如かず。勅勅を受西府の雲と消るとも

一念の霊は折々筑紫より彼所へ行通ひて心を慰り。汝右近の馬場に社を営て立寄便を得せよと告ぬ。綾子雖有夫に思へども其身賤く貧くれど右近の馬場に御社を建る夫能はぬ。只柴の菴のわろに小なる祠と営み瑞籬を結び五年ぞ間崇祭りし。其間に菜種と供物を献りし夫有れやへ今公て例年二月二十五日に菜種の御供の神事あり。其後天慶九年辛酉平野社の神職の男太郎丸と云者に菅神御託宣すらく。都北野右近の馬場の辺に一夜に千本の松生ずべし。是予が住す所なり。汝都西の京なる綾子と呼る女に力を添彼所に社を建よと告ぬ。太郎丸が又不思議に思ひ都へ上りて右近の馬場へ行くに小なる小人群集し此地前宵一夜の中に松千本生出ぬ。世の不思議なる事なかこと。とりどり噂しるに太郎丸が又託宣の著明を感じ西の京なる綾子が住家へ尋行対面して京神託の趣を結合とに相違て大内へ菅

神の御託宣の始終を奏聞し給へば。帝感歎あらせ給ひ。右近の馬場に御社を御造営在て綾子が家の小社を遷し奉り。今の北野の天満宮是なり。彼一夜の中に千本の松生ぜし地を今に千本と称す。又浪速天満の天神の御社も村上天皇の天暦年中菅神の御神託に依て社を御造営あり。河州道明寺の天満宮も同し頃御社を建られ其他諸國津〻浦〻まで此神を崇祭る所多く。神威の灼然たる叡感に新に日〻に新やて上天子より下億兆の庶民まで尊信し奉らざるなし。祈願〻て成就せざるなし。仰ぎ尊む所

去程に勅使は太宰府と云へ帰洛し。奏内して太宰府の神前に磐石の詩出現せし奇瑞を奏聞せられ。帝叡感斜ならず思召し。倍菅神を御信仰在〻。斯て後は天神地祇も怒を和げ給へば。世上穏かなり。上下心を安んじ給へ。延長三年六月主上御疱瘡を患せ給へ。諸王公卿大臣

殿に是を文菅霊の祟なりとて。和氣丹波の典薬に委ね。諸寺諸社に御平愈の加持祈祷を修せしめ給へ。尚陰陽頭に筮められるに占文吉兆で程なく御快復なさせ給へり。奏〻に列位かと得られるに。果して醫薬効を奏し。主上御本復在〻。是に仍て諸王公卿以下更なり洛中洛外の人民まで皆万歳と唱る。其翌年延長四年大和國多武峯の社を御造営在〻。是大織冠鎌足公の廟所なり。鎌足公在世の砌深く佛法に帰依在て當所に一基の多宝塔を建立し。念持の舎利を安置し十二の僧坊を建られ。又〻塔の峯と呼び。後多武峯と文字を書更へ。鎌足公又曽て我像を描せ将来朝家及我子孫の中に変事あらば豫告知へしと誓ひ額の血をうけて繪具に摺交用眼の儀式厳に営て一社に納られ。その霊威あらたにして末代に至る迄国家に凶事有んとする時は件の画像已と破裂表

一山鳴動して其凶変を告知し。変事治る時は画像の破裂自然愈合て旧の如し。ゆゑに奇特の霊像なれば。朝廷ゆも御崇敬在て今度社及諸堂を修理し金銀珠玉を鐫られ其荘厳眼を驚さぬ者無りけり。円五年大納言忠平延喜式六十二巻を献られ給ふ是は左大臣時平菅公を憤り後我も菅家ゆ劣ぬ文才有と世上へ知せん為紀長谷雄を相談対人ゆと延喜式を撰ませ給ふ。半途ゆて時平薨去せられ長谷雄も死没ゆ。時平の舎弟忠平兄の志を継ぎ残る巻撰ませ全部して献せられる也。円六年ゆ風土記六十巻を撰せ給ひ。円七年ゆ野道風ゆ勅して先年巨勢金岡ゆ画し賢聖の障子ゆ其銘を書せ給ひ。円八年九月主上御不豫ゆ依て帝位を春宮寛明親王ゆ禅の上此君と朱雀院とゆ幼稚ゆて賢君ゆて益ゆ藤原忠平左大臣時平補佐せられ四海太平ゆて皇統記圖會後編巻之六大尾